

日本音楽集団

第13回定期演奏会
THE 13TH REGULAR CONCERT

Ensemble Nipponia



— 曲目と出演者 —

1) 八村義夫：しがらみ 第二

〔能管〕望月太八 〔尺八〕坂田宏聰・古賀将之・横山勝也

〔三絃中棹〕杉浦弘和 〔三絃太棹〕坂井とし子

2) H. J. コルロイター：松尾芭蕉の四つの俳諧「幽」〈初演〉

〔篠笛〕望月太八 〔尺八〕宮田耕八朗・古賀将之・坂田宏聰

〔琵琶〕山田美喜子 〔三絃〕杉浦弘和 〔箏〕坂井とし子 〔十七絃箏〕宮本幸子

〔打楽器〕清水義矩・尾崎太一 〔ソプラノ・客演〕増田睦実

〔指揮〕田村拓男

3) 小山清茂：和楽器のための三重奏曲 より I・II・III 楽章

〔箏〕白根きぬ子 〔二十絃箏〕野坂恵子 〔十七絃箏〕宮本幸子

4) 三宅榛名：二十六夜 ——時間を持たない時間のために——

〈本年度委嘱作品・初演〉

〔能管〕望月太八 〔竜笛〕宮田耕八朗

〔琵琶〕山田美喜子 〔三絃〕杉浦弘和

————— 休 憩 —————

5) 三木 稔：孤響 ——独奏尺八のための——

〔尺八〕横山勝也

6) 三木 稔：凸 ——三群の三曲と日本太鼓のための協奏曲——

〈演奏会初演〉

〔尺八高音〕宮田耕八朗 〔十三絃箏〕白根きぬ子 〔三絃太棹〕坂井とし子

〔能管・篠笛〕望月太八 〔二十絃箏〕野坂恵子 〔琵琶〕山田美喜子

〔尺八低音〕横山勝也 〔十七絃箏〕宮本幸子 〔三絃細棹〕杉浦弘和

〔日本太鼓・指揮〕田村拓男

— PROGRAMME & PLAERS —

1) **Yoshio HACHIMURA : Shigarami No.2**

[Nk] MOCHIZUKI [Sh] SAKATA • KOGA • YOKOYAMA
[Sg-high] SUGIURA [Sg-low] SAKAI

2) **H. J. Koellreutter : “Yu”**

—Four haikai by MATSUO Basho—

<first performance>

[Sb] MOCHIZUKI [Sh] MIYATA • KOGA • SAKATA
[Bw] YAMADA [Sg] SUGIURA [13-Kt] SAKAI [17-Kt] MIYAMOTO
[Batt] SIMIZU • OZAKI [Sop] MASUDA

[Cond] TAMURA

3) **Kiyoshige KOYAMA : from TRIO for Japanese instruments**

[13-Kt] SIRONE [20-Kt] NOSAKA [17-Kt] MIYAMOTO

4) **Haruna MIYAKE : The Twenty-sixth Night**

—for the time without time—

<A commissioned Work by E.N. first performance>

[Nk] MOCHIZUKI [Rt] MIYATA [Bw] YAMADA
[Sg] SUGIURA

————— Intermission —————

5) **Minoru MIKI : Ko-Kyo for solo shakuhachi**

[Sh] Katsuya YOKOYAMA

6) **Minoru MIKI : Convexity**

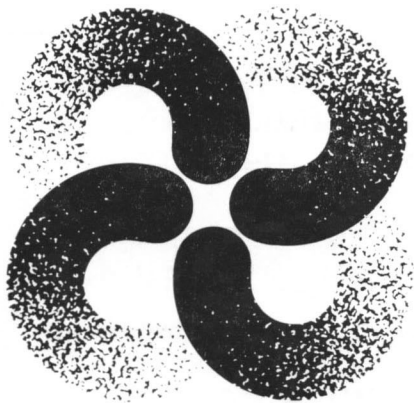
Concerto for three groups of Sankyoku and a Japanese drum

<first performance>

[Sh-high] MIYATA [13-Kt] SHIRONE [Sg-low] SAKAI
[Nk • Sb] MOCHIZUKI [20Kt] NOSAKA [Bw] YAMADA
[Sh-low] YOKOYAMA [17-Kt] MIYAMOTO [Sg-high] SUGIURA
[Drum & Cond] TAMURA

日本音楽集団第13回定期演奏会

曲目解説——池田逸子



八村義夫：しがらみ第二

この曲は、日本音楽集団の委嘱によって、昨年3月から4月にかけて作曲され、同年4月22日の第11回定期演奏会において、作曲者自身の指揮で初演されたものである。邦楽器による八村氏のはじめての作品であるが、その創作体験をつぎのように語っている——「西洋の楽器への作曲ならば、私は、自分の感性の方向に、楽器の特性を奉仕させるであろう。…しかし、『しがらみ第二』においては、私は、むしろ、楽器の特性に自分の感性をよりそわせる方向をとった。そこには、楽器の特性と自分の感性との交感がある。邦楽器には、西洋の楽器のような可塑性はない、と思えた。……邦楽器の特性は、邦楽曲古典と、分かちがたく密着している。私は、邦楽曲古典に対しての自分なりの感じ方から、邦楽曲作曲の意味をつかまえようと思った。古典の持っているさまざまなファクターを、私なりに解釈し、選択し、その表出力を拡大し、自分の主観を投入して、定着させること、私は作曲に際して、基本的には、そのようなやり方をとることにした。」（『音楽芸術』1970年8月号）

曲は5分余の短いものだが、終始、拍を感じさせない自由なテンポが指定され、ユリやヴィブラートなどによって強調された音高の不安定さ、ムラ息（とりわけ能管における）やスリ（三絃）などによる音色の変化が急激なクレッシェンドやディミヌエンドの頻繁な指定と相まって、きわめてエキサイティングな、一種、世紀末的な表情を呈している。その曲想は、たとえば「撥絃音と打撃音とが複雑にミックスした三味線の音は、私には、怨念こもった、血腥い、残酷な響きとして感じられる」（同上）といった風な、邦楽器の音色に対する、作者のいちじるしく主観的な感情移入にもとづいており、そこから、「二本の三味線は、三味線どうして切り合いをし、あるいは嗜虐的に弾きつづけることによって、能管と三本の尺八がつくりだす、自然空間に拮抗し、一種の無惨なりアリティを産みだすことを願った」（同上）ということである。

H. J. コルロイター：「幽」について

「幽」は単に松尾芭蕉の俳諧四句を音楽化したというだけではない。この作品は俳句の形式をそのまま基礎としているのである。俳句が五・七・五の十七音を本体としているように「幽」も七つの音の像に対して十七の音記号を持ち、それが十五・二十一・十五の音節関係を保っている。

やはり俳句と同じように、全体的構造を基としているのが「幽」の特徴である。つまり明確に位置づけられるような二元論、例えば協和音と不協和音、拍子の強弱、対照的テーマのグループ、旋律と和音、和声と対位法等は見当らない。音の連続の中に短い音、長い音、あるいは音の拡がりが非和声的な時間関係の中にあるのみである。

特に「幽」においては、音の体験というよりは、むしろ音によって意識に浮び上ってくる静寂の体験の方が重要である。音の響きから、響かざるものが認知される。そしていま再びこの静寂に依って、有限な現在の輝きが開花するのである。

「幽」は表現の無い表現、沈黙の祈りともいえるであろう。

翻訳：上川明子 東京ゲーテ・インスティトゥット

KOMMENTAR ZU “YU”

H. J. Koellreutter

“Yu” enthält nicht nur die Vertonung von vier Haiku-Dichtungen des Matsuo Bashô. Es wurden der Komposition ganz allgemein die Proportionen und die Form des Haiku zugrundegelegt.

Wie im Haiku 17 Silben sich auf 7 Worte verteilen, verteilen sich in “Yu” 17 Klangzeichen auf 7 Klanggestalten, und dem Silbenverhältnis 5/7/5 der Dichtung entspricht das Tonsilbenverhältnis 15/21/15 der Komposition, also eine dreifache Vergrößerung.

Wie dem Haiku liegt auch “Yu” eine Ganzheitsstruktur zugrunde: Es gibt keine ausdrucks-mässige ausgewerteten Dualismen wie Konsonanz und Dissonanz, starke und schwache Taktteile, antithetische Themengruppen, Melodie und Akkord, Harmonie und Kontrapunkt. Es gibt lediglich sich zu einem Klangkontinuum ergänzende kurze und lange Töne und Tonflächen, die in einem aharmonischen Zeitverhältnis zueinander stehen.

Schliesslich ist in “Yu” wesentlich nicht das klangerlebnis als solches, sondern das Erlebnis der Stille, das vom Klang erzeugt und ins Bewusstsein gehoben wird. In “Yu” wird, was nicht klingt, wahrnehmbar durch den Klang. Die ser wiederum entfaltet dank der Stille die Strahlkraft einer begrenzten Gegenwärtigkeit. “Yu” ist ausdrucksloser Ausdruck, ein stilles Gebet.

小山清茂：和楽器のための三重奏曲

この曲は、1967年7月にNHKの委嘱により書かれたもので、初演は同年8月3日、NHKホールでさわらび会によって行なわれた。

曲は、全部で五楽章から成っているが、総じて、伝統的な音階、なかでも民謡音階と都節音階とを基調にして、旋律部分と伴奏部分とがはっきり区別されるような書法によっており、作曲家特有の簡明直截な表現となっている。

第一楽章 2/4拍子 ♩=108拍

第二楽章 4/4拍子 ♩=60~69拍

第三楽章 6/8拍子 ♩.=80拍

第四楽章 4/4拍子 ♩≐54拍

第五楽章 9/8拍子→8/8拍子→9/8拍子 ♩.≐80拍

<注>今回は第一・第二・第三楽章を演奏します。

三宅榛名：二十六夜

「時間のない時間」のために ————作曲家———

私たちの時間は、いつもたいていの場合には、世紀でくざられ四半世紀でくざられ、月でくざられ、日で、時で、分で、秒でくざられるというふうに限られた空間として存在しているわけですが、西洋の音楽と東洋の音楽という風にもし分けるとしたら———こういう風に音楽を分けることがまずバカげているわけですが、話の続き具合のために分けるとする——西洋音楽の観念は「時間」を限定して、どこからどこまでということを明確に聞き手の空間の中に位置づけているわけです。たとえばベートーヴェンがそうですし、バッハだって、モーツァルトの音楽だって、ここからここまでの時間的空間を限定するわけで、それを私たちは音楽をきく時間として認識するということになります。

と、すると、ソウ・コールド西洋音楽的な作品はすべて「はじまり」と「おわり」でくざられた時間を持った存在ということに、だいたいの場合にはなるわけです。

東洋の音楽の大体は———というのもずい分、乱暴な言い方ですが、枚数が限られているためもある、こういう風に簡単に言うてしまうことにすると———時間を限られた空間としては認識しない、言いかえれば、その時間は「時間」という限定された時間空間としては存在しない、ということになっています。つまり、音楽は、ここでは、世の中を流れているそして、人々の中を流れている「時間を持たない時間」にピッタリと添い寝したというかっこうでデレデレと、親密に、ただただ流れて行くのです。

三木稔：孤響——独奏尺八のための

コロムビア・レコード委嘱作品であるこの曲は、昨年3月から5月にかけて作曲され、同年9月29日、コロムビア主催の「今日の音楽・明日の音楽」(虎の門ホール)で初演された。

作曲家三木稔はつぎのように述べている——「……最近の尺八の曲が往々示し勝ちなまやかしの冥想性とは無縁の、激しい求心性に裏付けられた作品を書きたいと願ってきました。……(中略)今述べてきた求心的な作品が本曲又は本曲的であるのならば、本曲をこそ書きたいと思ったのです。だが、本当の本曲を吹くことのできる尺八奏者は誰もこの『孤響』を本曲とも、本曲のようだとも認定してくれないでしょう。……悲しいけれど、この音譜が私の尺八に托し得る極き付きのものと思って頂きたいのです。」(コロムビア・レコード『三木稔の音楽』解説パンフレットより)——

作曲家は最初から、長管尺八を吹く横山勝也氏を想定して書いたと言っているのだが、その横山氏について、「尺八本曲や海童道の持つ強烈な伝統の姿に、異質なもののまでも等質化して行く」「すべてを自分の内なるものの世界に引き込むデーモンの持主」(『音楽芸術』1970年1月号)を指摘し、そのような横山氏のパターンを崩してでも「別のデーモンの生じうる余地が……存在し得るのか、どうか真剣に考え続け」(同上)るなかで書いたというこの曲は、ムラ息やユリなどの使用についてのきびしい禁欲によって、かえってその効果を高めているともいえよう。そして、全体を通じて感じられる、きわめて抑制された、そのピアノシモの表現のなかに「本曲」への秘められた挑戦を聴きとることはできないであろうか。まだ「本曲」を知らない時期に書いたという『ソネット』(1962)や、「本曲」に接してから書かれたのではあるが、『四群のための形象』の第二曲目『居機』(1967)と比べてみると、一層興味深く聴かれよう。

三木稔：凸——三群の三曲と日本太鼓のための協奏曲

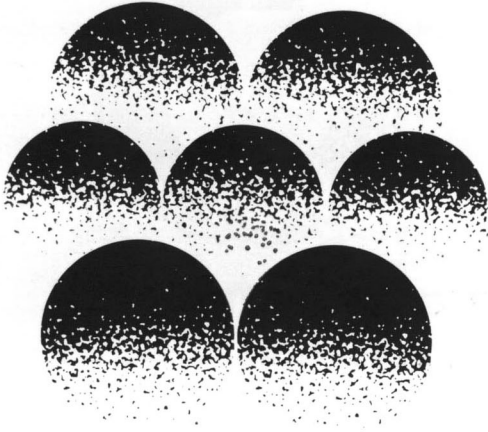
「私たちが目先のめまぐるしさにとらわれたり、過去の芸術音楽に心を打たれて、その高みに到着しようともがいてるとき、ふと自分の足下を見失うことがあります。そのようなとき、私は常に祖先の祭りの精神に一度立ち返ることにしています。私の血の自律作用というべきものでしょうか、復元性もしくは回春性というべきでしょうか。」(三木稔、コロムビア・レコード解説パンフレット)

やはりコロムビアの委嘱によって書かれたこの作品は、『孤響』について、昨年5月から7月にかけて作曲された。演奏会形式では今回が初演になるわけである。

「この曲の作曲にあたっては、…(中略)僕たちのやっているアンサンブルが果してこれでよいのかとできうるかぎり自分にそして伝統に問い直すことから始め」、その「苦悩に満ちた結論」(同上)がこの作品であると作曲者が語っているように、ここでは、演奏者は全てそれぞれソリストであると同時にアンサンブルの担い手であるという、だが、両者が単に並列的に共存しているのではなくして、前者が止揚されたかたちで後者となるといった設定がなされている。そしてこのことは、三群の三曲合奏を舞台の左(第一群……尺八高音・十三絃箏・太皷三絃)・中(第二群……能管・二十絃箏琵琶)・右(第三群……細絃三絃・十七絃箏・尺八低音)に配置し、それらを統轄するようなかたちで指揮者を兼ねた祭太鼓奏者がいるという、演奏形態への配慮にまで及んでいるのである。

曲の構成は二つの部分に分かれており、第一部では芸術音楽的なものからの、第二部では民俗的なものからの伝承を考へにおいて書いたということである。第一部では、笛類——箏類——撥類の順に受け渡し奏されていき、さらに第一群——第三群——第二群と奏されていって、第二部に移っていく。第二部は琵琶のソロで始まる。ついで祭太鼓が登場し、それによって琵琶が主要テーマを奏す。続いて三絃——笛類——箏類と加わり高まったところに、祭太鼓の特徴あるリズムがはじき出されてくる。以後、祭太鼓のリズムと各楽器類あるいは各三曲群が多様なからみ合いを見せつつ、最後のトゥッティへとまさに突進していくのである。この第二部のおよそ三分の二をすぎたあたりで、祭太鼓のリズムによって、自由な楽器によるカデンツァが奏されてもよいことになっているが、今回は、野坂恵子さんの二十絃箏によって、自作のカデンツァが奏されることになっているそうで、聴きどころのひとつであろう。

——「……『凸』とは、アポロンの世界を築くための突撃ラップであり、訥々とした田舎弁での口説です。」（三木稔同上）



池田逸子：プログラム解説を終えて

御存知の方もあると思いますが、『音楽の世界』という雑誌（月刊）があります。その雑誌が、今年に入って、3・4月号と二カ月にわたって《邦楽の発展》という特集を行ないました。

私もそこに原稿を投じた者のひとりだったのですが、その特集の執筆者たちに対して、日本音楽集団から、実際の音をもっともっと聴いて欲しいといった一文が寄せられてきました。私としても、正直なところ、日頃、意欲だけは旺盛なのですが、実行不足を気に病んでいた折でもあったので、全く痛いところがないわけでもなく、今回、三木さんからプログラム解説の仕事依頼されたときには、とうとうおいでなすったかと思いきや、だがこのしごきは神妙に受けなければなるまいと心ひそかに覚悟したのでした。むろん三木さんはしごきなどという野蛮なことを企んだりする方ではないのですが、でも最近の三木さんの発言などから推察すると、これはやはりしごきなんだという確信をいよいよ深めているのです。それは、私のようなヒヨコを含めて、批評（評論）を仕事としている者、また、仕事としようとしている者すべてに対するしごきの筈なのです。

よく指摘されているように、1960年代のなかごろから、邦楽器による作品が目立ってきました。それは、量的にめざましくなってきたためということもありますが、それよりも、従来、その方面をあまりにも不当にないがしろにしてきたことの、いわば裏返しとして目立ったと言った方が正しいのではないのでしょうか。もちろんその中で、質的にすぐれた作品が実際に出てきていることは言うまでもありません。ところが最近、このような動向に対して、事態の表層をかすめとったような、何やら批判めいた文章が時折目につくようになりそれは、三木さんの言葉を借りれば、「『現代邦楽批判ブーム』とでもいうべき珍現象」を示しているのです。

明治以来、一方で伝統音楽が長い間、日蔭に追いやられていたなかで私たちの内に植えつけられてきた「洋楽」をも捨てることなく、現代という歴史的時点から内なる伝統をあらためてとらえかえし、再発見することによって、その新たな継承発展を行なっていくということは、今後の私たちの主体的音楽創造にとって、絶対に欠かしえないことだと私は考えます。ですから、そのような前提からすれば、批判は当然可能な限り具体的になされるのでなければ意味がないと思います。そして、日本音楽集団の発展をも含めて、これからの邦楽の発展、いや日本の音楽の発展にとって何よりも必要なことは、以上のような観点からの聴衆の参加・協力、および聴衆の代表としての批評家の協力だと思うのです。つまり、私たちの音楽の未来は、今夜、この定期演奏会を聴きにきているひとりひとりにかかっているのだと言っても、決して言い過ぎではないのではないのでしょうか。



GRUSSWORT

H. J. Koellreutter

Die Entstehung einer Weltkultur ist ein Imperativ der technologischen Welt. Eine Entwicklung in dieser Richtung wird sich nicht vermeiden lassen, auch nicht, wenn es noch immer Kräfte gibt, die eine solche zu verhindern suchen – weil sie eine Notwendigkeit geworden ist.

Eine solche Weltkultur aber setzt einen Wandel der Gesellschaftsformen voraus, der nicht das Resultat einer Reihe von kleineren Veränderungen und Verbesserungen sein wird, sondern sich aus einer radikalen Umwandlung des Bestehenden, gleichsam als Sprung von einer Ebene auf eine andere, ergeben wird; denn das Entstehen eines neuen Gesellschaftssystems bringt nicht nur einen Wandel in einzelnen Details, sondern eine Wesensänderung des Ganzen mit sich.

Es wird daher als Folge und Reflex dieses soziokulturellen Wandels eine Musik entstehen, von der wir noch nicht wissen, welche Eigenschaften sie charakterisieren werden. Es ist nicht vorauszusagen, ob die im Entstehen begriffene Weltkultur und die Niederreissung der nationalen und rassistischen Schranken zu einer stärkeren Vermischung der Rassen und Kulturen führen wird, oder zu einer Konzentration auf vertraute Kulturelle Werte der nationalen Tradition.

Aus diesem Grund glaube ich: Es wird in der Folge eines weltweiten wirtschaftlich-gesellschaftlichen Wandels eine Musik entstehen, die zwar Ausdruck eines universellen, objektiven Denkens sein wird, die aber gleichzeitig die traditionellen Werte früherer Kulturen integrieren wird. Unter diesem Gesichtspunkt erscheint das Wirken des Ensemble Nipponia besonders wertvoll und in die Zukunft weisend.

御挨拶：H. J. コルロイター

世界文化はこの高度に技術化された世界から、なくてはならないものとして生まれてきたものであります。妨害せんとする勢力がいまだに存在しようとも、この方向づけは一たん必然性となったからには、曲げられることはないと思います。

このような世界文化はしかしながら社会体制の変化を前提といたします。それは諸々の小さな変更や訂正の結果としてではなく、いわば一つの次元から別の次元への飛躍のように現存するものの徹底的な変化から生じてくるものであります。それというもこの新しい社会組織は個々の小さな変形のみならず全体的なものの根本的変容をもたらすからです。

上記の意味におけるこの社会的文化的変化の現われとしての新しい音楽——その特徴はわれわれにはまだ未知ですが——が起ってくると思います。誕生しつつある世界文化そして民族的人種の障壁の除去がどちらの方向へ導くか、人種や文化のより強力な混合へか、それとも民族的伝統の熟知された文化価値の専念へか、それは予測できません。

以上のことから私は全世界に及ぶ経済的社会的変化の中から、普遍的客観的思考の表現であり、同時に古い諸文化の伝統的価値をも合わせ持つそのような音楽が生れてくると考えます。

日本音楽集団の活動はこの観点からして、特筆すべきであり、将来性を約束されているものと信じる次第であります。

翻訳：上川明子 東京ゲーテ・インスティトゥート

混乱と文化：坂井とし子

世の中はあらゆる方向に止まることを知らぬかのように発展しております。その大きなエネルギーと、発展の先が破壊へも通じるといふ不安と、虚無が混沌と入りまじり、それが音楽の世界にも、種々雑多な形であらわれているではありませんか。

時あたかも室町期、めざましい産業と交通の発達にともない、町人、農民階級の力が大きくなるのび、時の支配者武士階級を大いにおびやかすことになりました。そのための弾圧と、抵抗による混乱が起き、下剋上の時代とはなりました。文化の面においても、下の者の文化が高まり、農民から出た田楽が狂言に、武士階級の猿楽が能へ、お互に影響し合いながら発展しました。

支配者に対する農民のたくましい反逆的な面魂しいを表わした狂言の「小武悪」の面などは時の将軍足利義正を大いに感動させたとは……やはり民族的に高められた芸術は、相反する立場にありながらも共通の感動をもたらすことができるのでしょ。

反骨精神のたくましい楽天的な狂言と厭世的なあきらめの能が、これ以上とけ合わずに今日まで来てしまったことは、やはり長い長い鎖国による封建制度の時代を経て来たことを物語っております。そのもっと以前はどうだったでしょう、貴族の支配していた頃は。

大オーケストラのものが千三百年以上も前に日本に入ってきていながら、そのままの形で今日まで来てしまったとは、まさに日本民族の音楽にならずじまいであったということでしょう。それにも拘わらず、外国からのお客様には日本の代表的な音楽として必ず紹介されるのも不思議なことではありませんか。日本人でさえごくわずかの人が演奏は勿論、目のあたり見聞きすることもありません。

戦争という大きな混乱のあと、やんごとない宮内庁楽部の楽人達も、野に下って民間の音楽なども演奏するようになりやと笙・ひちりきなどの珍らしげに聞く機会もふえてまいりました。そしてわが集団においても、楽器持替でひちりきを奏する人も現われました。これら貴族独占の音楽もひとたび民衆の中に入れば、日本民族の音楽となり、楽器となる日も遠くはないことです。

町人が輸入した楽器ということで、支配階級には見向きもされなかった三味線音楽が、日本の民族音楽の大きな基になったことはいうまでもなく、千年もの間雅楽の中の一つの楽

器であった箏も、民間に入り八橋検校によって独立され、日本人の心をうたいあげられ、民族的な方向へ歩きはじめました。今日の箏の発達の第一歩はその時からです。

今、作曲界では日本楽器ブームなどといわれておりますが、民族の心なくしては人を感動させる音楽にはなりません。

私達日本音楽集団はこの昭和元禄の混乱の中に、これからの日本民族の音楽をうち立てて行きたいと思っております。

私の中の二つの世界：杉浦弘和

私の音楽の世界の中には、まるで別個の二つのものが存在している。あえて別個と言うのは、まだ私の内で二つのものが完全に連結出来ずに部分的に背を向けているのだ。

その二つの世界、それは長唄の三味線と日本音楽集団のそれである。小さい頃よりその古典の長唄の世界に埋没して育って来た私にとって、集団に参加して、かつて触れたことのない異質な音の世界は、私には何と大きなショックだったろうか。毎日が楽器の可能性の試験であり、創造であった。

私達古典の世界にいる人間は、ともすれば伝統にあぐらをかき、「どうせわからないんだろう……。それならそれでいいじゃないか」「今の奴等には分りゃしない」というようなデカダンな気持を持っているのだ。それかといって、分ってくれない日本人に何とも淋しい気持を抱き、古典を分らせるように一生懸命ヤッキとなって媚びている。

明治以後、西洋音楽の転入と共にその気持は古典をする人間にとって一種の宿命ともいえるものではないだろうか。変な和洋合奏、新らしがった音楽、私にはそれがたまらなくイヤだった。それならばむしろアナクロニズムといわれようが、逃避的といわれようが古典の長唄三味線の方がどれほど充実していることか。

しかし集団によって私はその気持をぬぐい去ることができた。私流に言えば、本当のホンモノにぶち当たった。ついに見付けてくれたと思う。長沢氏や三木氏に私は御礼をいいたい。集団のメンバーの私が言うのもおかしいが、このチームの行き方の無限の可能性は、何と喜ばしいことだと思ふ。

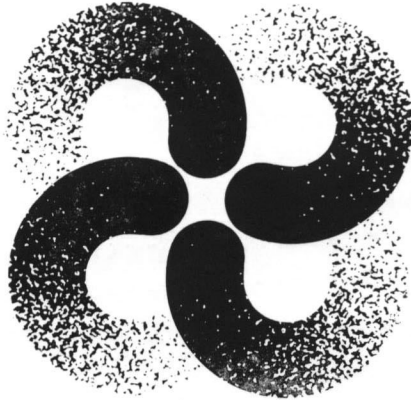
前にもいったように、今私には与えられた曲を強引に古典の中に引き込んで弾いてみたい。古典の持つ独特のフィーリングの世界に消化させて演奏してみたい。しかし現在ではまだまだ一緒にはなってくれない。これがこれからの私の課題ではないかと思ふ。

可能性を追求され、自分自身でも解らない何かを引っ張り出してくれる音楽集団、私はメンバーの一人として、この集団に参加していることを非常に幸せに思っている。

The members of The Ensemble Nipponia

日本音楽集団団員

尺八	横山 勝也	<i>Katsuya YOKOHAMA</i> Shakuhachi
尺八・竜笛・篠笛	宮田耕八朗	<i>Kôhachiro MIYATA</i> Shakuhachi, Ryteki, Shinobue
尺八	坂田 宏聰	<i>Kôsô SAKATA</i> Shakuhachi
尺八	古賀 将之	<i>Masayuki KOGA</i> Shakuhachi
篠笛・能管	望月 太八	<i>Tahachi MOCHIZUKI</i> Shinobue, Nohkan
三絃	杉浦 弘和	<i>Hirokazu SUGIURA</i> Sangen
琵琶	山田美喜子	<i>Mikiko YAMADA</i> Biwa
箏・三絃	坂井とし子	<i>Toshiko SAKAI</i> Koto, Sangen
箏	白根きぬ子	<i>Kinuko SHIRONE</i> Koto
箏・二十絃箏・三絃	野坂 恵子	<i>Keiko NOSAKA</i> Koto, 20-string Koto, Sangen
十七絃箏	宮本 幸子	<i>Sachiko MIYAMOTO</i> 17-string Koto
打楽器・指揮	田村 拓男	<i>Takuo TAMURA</i> Percussion, Conductor
打楽器・マネージャー	清水 義矩	<i>Yoshinori SHIMIZU</i> Percussion, Manager
打楽器	尾崎 太一	<i>Taichi OZAKI</i> Percussion
作曲・代表	長沢 勝俊	<i>Katsutoshi NAGASAWA</i> Composer, Chief of the Ensemble
作曲	三木 稔	<i>Minoru MIKI</i> Composer



〈団友〉 芝祐靖 竜笛, 砂崎知子 箏・琵琶, 佐藤英彦 打楽器, 芹沢英雄 会計監査
 石田早苗 マネージャー, 鞍掛昭二 幼児教育, 川崎詳悦 教育研究主任,
 元橋康男 作曲, 広瀬量平 作曲, 田中利光 作曲, 仲俣申喜男 作曲

お知らせ

◎今回の演奏会のポスター・チラシ・入場券・プログラムのグラフィックデザインは、デザイン界の第一人者で、集団の運動の強力な支持者である田中一光氏とそのデザイン室の人たちが全く採算を度外視して協力して下さいました。この欄をかりて心からお礼を申し上げます。

- ◎集団の今年の公演予定は次の通りです
- 9月22日 岡山市民会館で岡山県芸術祭「現代邦楽のタベ」
- 9月25日 徳島郷土文化会館で徳島県芸術祭「三木稔作品による日本音楽集団演奏会」
- 9月27日 大阪厚生年金会館中ホールで「第14回定期演奏会」
- 9月28日 名古屋中日ホールで「日本音楽集団演奏会」
- 10月25日 東京文化会館の東京交響楽団定期で三木稔作曲「序の曲」に出演
- 11月10日 都市センターホールで長沢勝俊作品による「第15回定期演奏会」
- 12月 日 「青少年のための伝統音楽シリーズ」第一回

- ◎団員のリサイタルは次の通りです。
- 10月19日・11月15日 日経ホールで野坂恵子「箏独奏曲の系譜」連続演奏会
- 11月5日 文化会館小ホールで横山勝也尺八リサイタル
- 12月16日 日経ホールで宮本幸子十七弦箏リサイタル

◎詳細は次の機会にお知らせしますが、日本音楽集団は来年9・10月にヨーロッパ演奏旅行を行います。ベルリン音楽祭フランドル音楽祭などから招聘されているほか、西・東欧に広く私たちの音楽の伝導行脚をするよう折衝中です。

◎あらためて書く必要もないと思いますが、コロムビア・レコード「日本音楽集団による三木稔の音楽」が昭和45年度芸術祭大賞を受け、又、先日は団員の横山勝也が46年度芸術選賞を授けられました集団を見守って下さる諸先生、協力者及び愛好者あってのたまものと感謝しております。

◎NHK・FM「現代の日本音楽」の6・7月の放送予定のうち、集団関係は次の通りです。

- 6月9日 三木稔作曲「箏譚詩集」を野坂恵子が独奏
- 6月16日 牧野由多可作曲「風」を宮本幸子が独奏
- 6月23日 石井真木作曲「遭遇Ⅰ」を横山勝也が園田高弘氏と演奏
- 7月7日 石桁真礼生作曲「無依の詠」を田村拓男指揮の集団が演奏

◎集団関係のレコードで最近発売されたもの及び近く発売されるものを紹介します。

- キング・レコード「日本音楽集団による日本の民謡」(SKK673)
＜編曲＞若松正司 小川寛興
- コロムビア・レコード「日本美の響き——和楽器による日本旋律集」(YS-10097)
＜編曲＞長沢勝俊
- コロムビア・レコード「尺八プレイズ・パッサ」(NCB7008)
＜尺八＞宮田耕八朗ほか

◎懸案でありながら着手できずにいましたが、日本の楽器の教育面にとりあえず前向きにとり組んで方向を探るために「日本音楽集団教育研究会」(仮称)をスタートすることにしました。川崎詳悦氏が主任となって広く関心のある方々に呼びかけ、毎月一度研究集会を開くことになると思います。第一回は何を研究すべきかという原点からの討論になります。ふるってご参加下さい。

◎プログラムに挿入しましたチラシの通り、当集団では日本の楽器のアンサンブルを志している人のために、8月19日から軽井沢で夏期講習会を行うことにしました。はじめての試みです。邦楽サークルの学生さんやサラリーマン、誰でも結構です。ふるってご参加下さい。

◎今年度友の会(旧定期会員)は定員を超えましたので締切らせて頂きました。現会員以外で来年度の申込みされる方は事務局にハガキでお申込み下されば、来年度募集の際にご案内いたします。

◎この演奏会の制作は次のスタッフで行いました。

- 企画 三木 稔
マネージメント 清水義矩
友の会係 望月太八・坂田宏聰
舞台監督 一谷俊彦(未来プロモーション)
宣伝美術 田中一光
各種印刷 北星印刷
事務局 渋谷区神宮前3-6-14
TEL:03-402-0709(〒150)

＊つねにユニークな演奏活動をしている日本音楽集団の最新LP!!

日本音楽集団による日本の民謡

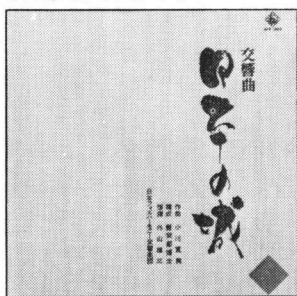
小諸馬子唄／ソーラン節／
越後の子守唄／おてもやん／花笠音頭／
郡上節／五木の子守唄／よさこい節／
姉こもさ／茶きり節／安来節／
十三の砂山／お江戸日本橋／谷茶前節

《演奏》日本音楽集団

■SKK-673(ステレオ30cmLP)／¥1,500



《絶賛発売中》



うなる和楽器群…輝くオーケストラ…
日本の交響曲の決定盤!

第23回芸術祭参加作品 小川寛典・作曲

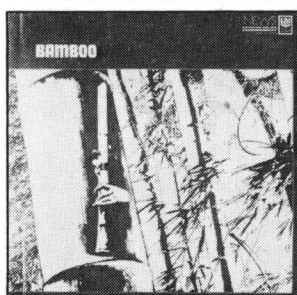
《交響曲》日本の城

築城／本丸／戦いの城／落城／不滅の城

〔指揮〕外山雄三／〔演奏〕日本フィルハーモニー交響楽団

／和楽合奏団／〔合唱〕キング混声合唱団

■SKR-1003(ステレオ30cmLP)／¥2,000

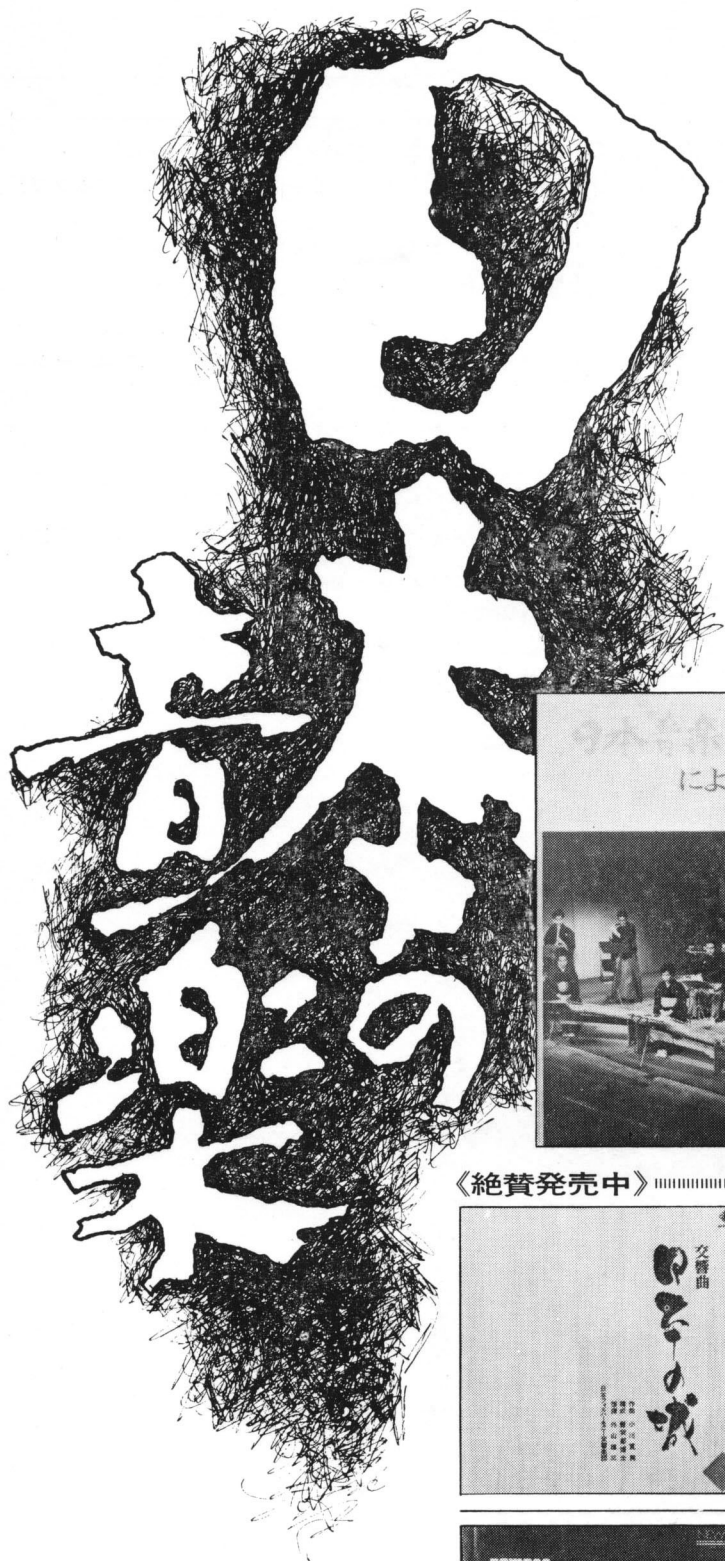


これが日本のサウンドだ!!
新しい尺八に挑戦した意欲的アルバム
(ニュー・エモーションナル・ワーク・シリーズ)

バンブー

テイク・ファイブ／最上川船唄／陰と陽／
朝日のある家／サン・ホセへの道／
ソウル・バンブー／コール・ミー／他

(尺八)村岡 実／(囃子)堅田喜佐久／堅田啓光／
(琴)山内喜三子／他〔演奏〕ザ・ニュー・ディメンション
■SKK(U)-3001(ステレオ30cmLP)／¥1,500(ユナイテ)



キングレコード

これぞ現代人が求め続けていた新しい“ひびき”

日本の代表的作曲家たちが伝統的な和楽器のために作曲した現代音楽の傑作の数々！
第一流の演奏家たちをここに結集して完成した音楽の新しいジャンル

響音 Hibiki



和楽器による現代日本の音楽

Contemporary Music for Japanese Traditional Instruments

■多くの人々に知っていただきたい……

菅野浩和氏

ここ数年来、洋楽系の作曲家が日本の伝統楽器に取組んだ仕事がいよいよ目立つようになってきて、着々と傑出した作品をこの分野に登場させるようになってきた。十年前のこの領域での成果の僅少さにくらべると、全く今昔の感に耐えない。もはや今日では、洋楽器の世界、日本楽器の世界と、狭いセクト観を持つことなど、もはやナンセンスになってしまった。

こういう時点に当って、こうした洋楽系作曲家による日本楽器作品のダイジェスト的集大成レコードを完成したことは甚だ意義が大きい。私自身、ある程度、この企画の相談にもあずかっていたりしているので手前味噌になりそうだが、しかし良いものは良いという見地から、やはりこうした重要な音楽を持つレコードができた以上は、それがなるべく多くの人々に知ってもらいたいという希望をもつことは許されてよいと思う。単に国内に止まらず、外国に出したときに大きな評判を呼ぶだろうことも想像している。

《収録作品》

清瀬保二：四重奏曲～日本楽器のための／伊藤隆太：六重奏曲／
小山清茂：四重奏曲第1番～和楽器のための／清水脩：三つのエ
スキス／間宮芳生：四面の箏のための音楽／入野義朗：尺八と箏
の協奏的二重奏／石桁真礼生：箏のための組曲／八村義夫：しが
らみ第2／武満徹：エクリプス／諸井誠：対話五題／広瀬量平：
二つの尺八のためのアキ／長沢勝俊：組曲「人形風土記」／牧野由
多加：太禱協奏曲

《演奏者》

日本音楽集団（八村義夫、田村拓男＝指揮）／邦楽四人の会

〈箏〉後藤すみ子、矢崎明子、沢井忠夫、沢井一恵、菊地梯子、
高畑美登子、和田克子

〈尺八〉北原篁山、酒井竹保、青木静男、横山勝也、山本邦山
〈十七絃〉菊地梯子、宮本幸子

〈竜笛〉芝祐靖

〈琵琶〉鶴田錦史

〈打楽器〉雨宮靖和

〈地唄三絃〉矢崎明子

〈義太夫三絃＝太禱〉松浦君代

●JRZ-2505～8 30cmステレオLP 4枚1組 ¥8,000
豪華カートン・ボックス入 別冊解説書付

RCAレコード 発売元 日本ビクター株式会社

●芸術祭大賞受賞に輝く

日本音楽集団による

三木稔の音楽



- 序の曲 ●天如 ●ソネット
- 凸 ●はばたきの歌 ●孤響
- 箏譚詩集 ●四群のための形象
- 古代舞曲によるパラフレーズ
- くるだんど

演奏・日本音楽集団 他

指揮・秋山和慶

▶JX-21~4 30cmステレオLP 4枚組
(カートン・ケース入り) ¥7,200

楽器解説入り別冊解説書

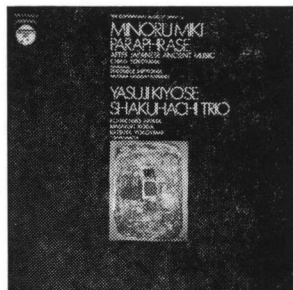
全曲完全楽譜付

(グラフィック・デザイン・田中一光)



再生時の音のひずみを取り除いた、マスターソニック・ノン・ディストーション・カッティング使用のレコードです。

●日本音楽集団による名演奏が評判です。是非ご試聴下さい！



三木 稔

古代舞曲によるパラフレーズ

清瀬保二

尺八三重奏曲

☆横山千秋指揮 日本音楽集団、横山勝也・古賀将之・宮田耕八朗

▶OS-10052 30cmステレオ ¥2,000

尺八 プレイズ バツァ

①管弦楽組曲第2番より ロンド／ボロネーズ／パティネリ

②ハープシコード協奏曲第5番よりラルゴ

③ブランデンブルグ協奏曲第2番よりアンダンテ 他全6曲

☆尺八／宮田耕八朗

▶NCB-7004 30cmステレオ ¥2,000(マスター・ソニック・レコード)



日本美の響き ～和楽器による日本旋律集～

木曾節／赤とんぼ／通りゃんせ／花嫁人形／江戸の子守唄

鈴をおさめて／平城山／荒城の月／待ちぼうけ

叱られて／さくらさくら／お江戸日本橋 他

編曲・長沢勝俊

☆日本音楽集団 ▶YS-10097 30cmステレオ

¥1,900 (7月10日発売)



コロムビアレコード

声をたいせつにする人に好評!

ビーナトローチは歌う人、声をよく使う人の
のどを大切にする人にとくに好評です。

主成分の酵素リゾチーム末がのどの痛み、ハ
レをおさえてくれ、さわやかな香りを口いっ
ぱいにひろげてくれるからです。

ビーナは新しいタイプの《のどの保健剤》です
へピースモーカーにもおすすめします。

のどがスッキリします。



のどがスッキリ

ビーナ トローチ

《包装》12錠・24錠・60錠



小川楽器店

文京区本郷6-24-10 TEL(811)2235

